

2006年 9月16日(土) 日本語教育史研究会研究発表会 於明海大学
指導教授 諸星美智直教授 発表者 國學院大學大学院 博士課程後期1年 坂本哲平

松本亀次郎『言文対照漢訳日本文典』の「時」

1 発表の趣旨

明治期に行われた中国人留学生向けの日本語教育において、その嚆矢であり、また、最も重用された教科書が松本亀次郎『言文対照漢訳日本文典』（以下『漢訳日本文典』）である。本発表では『漢訳日本文典』に著された文法学説を、明治期の、文法研究史との関係の中で捉え、その特徴と意義を探ろうとするものである。本発表では、文典における時制に関する記述を取り上げ、その学説の日本語教育という必要性から選択された最も特徴的な部分であることを指摘する。

2 「学史」研究のこれまで

明治期、国内での日本語教育の中心は、中国（清国）からの留学生のために行われた留学生教育であったといえる。三矢重松、松下大三郎を始めとする当時の国語学者達も参加し、この留学生教育は日中戦争による断絶まで、大きな発展を遂げるのである。この時期の留学生教育について、官、私を問わず創設された留学生学校や日本語教師、また、留学生のために用意された教科書群等、日本語教育史の方面から光が当てられ、多くのことが明らかにされてきた。しかしながら、教壇に立った日本語教師達が、自らの教科書に残した学説について検討を加えようとする、いわば「学史的」視点に立った研究は、ほとんどなされぬままとなっている。管見の限りでは、関正昭氏による文法研究史の中に日本語教育の影響を探る一連の研究、増田光司氏による松本亀次郎『漢訳日本文典』の解題（増田氏2001）があるのみである。当時の日本語教育がどのようなものであったのか考えようとするならば、もちろんのこと日本語教師達の学説を理解することが必要となるであろうと思われる。また、国語学者達との交流を視野に入れば、自ずと文法学説との関連、影響を明らかにすることが求められる。いわば「日本語教育学史」という視点からの研究が求められるのである。

関正昭 1987 「松下大三郎と日本語教育 - 『漢訳日本口語文典』の先駆性 - 」『中京国文』5

1988 「三矢重松・松尾捨次郎と日本語教育」『中京国文』7

1997 『日本語教育史序説』スリーエーネットワーク

増田光司2001『『言文対照漢訳日本文典』解題 - その特徴及び文法を中心として』『東京医科歯科大学教養部研究紀要』31

2 松本亀次郎文典の特徴

発表者は、『漢訳日本文典』（國學院大学図書館蔵、初版を対象とした。）の学説的特徴を福井久蔵の言及に基づき、修士論文においてまとめた。福井久蔵『日本文法史』には、『漢訳日本文典』について、次のような言及がある。

「現今最広く用ひらるゝは、松本亀次郎氏の言文対照漢訳日本文典なるべし。この書は卅七年七月第一版を出し、今既に十七版を重ねといふ。顧ふに首尾整へる漢訳日本文典の嚆矢とすべきか全書を分ちて三篇となし、一篇には品詞を概説し、その末に、主要の助動詞及助詞の一覧表を掲げ、第二篇には文章を概説し、その形式成文配列を明らかにし、第三篇は品詞を詳説し、その性質・効用・変化・用例を詳にせり。その学説は三土氏並に三矢氏の文典により、動詞の変化には三矢氏に倣ひて前提法を設け、これを順態逆態の二つに分ちたり。形容詞には本来のく し き及し し きの外になりたり かりを加へ所々語法を対照せり。」（「清国留学生の教科用文典」二重下線は発表者による）

この言及をもとに、三土忠造『中等国文典』、三矢重松・清水平一郎『普通文法教科書』との三書比較を再度行った。特に、時制に関して「完了」を取り入れ、三土の文典を踏襲したものであること、また、用言とその活用について三矢・清水の文典を踏襲したものであることを確認し、『漢訳日本文典』の学説的特徴であることを指摘した。これにより、『広日本文典』を基礎としながらも、国文典と異なる目的から、この二点において、特に先進的な学説を取り入れた文典であると文法学上の位置づけを得た。

福井久蔵『日本文法史』 明治40年・1907 大日本図書

三土忠造『中等国文典』 明治31年・1898、上・中・下巻 富山房

三矢重松・清水平一郎『普通文法教科書』

明治34・1901、2月に上巻、同3月に中下巻 明治書院

3 『漢訳日本文典』の「時」

3 - 1 三土忠造『中等国文典』の影響

さて、松本亀次郎は『漢訳日本文典』例言において、三矢・清水両氏の文典を参考にしたことを明言しているが、三土忠造の文典については一言も触れていない。福井の言う影響は、術語によるしかないのである。かといって、三土文典の影響と思われる部分はここだけである。ここに、松本の「時」に関する特別な意識が見えないだろうか。

三土忠造『中等国文典』は明治後期、全国で用いられた国文法教科書であると共に、国文典において初めて「完了」の術語を用いたことで知られている。三土は当時流入していた、ネスフィールドの英文典を参考にし、「つ・ぬ・たり・り」を「完了」として、過去時制と切り離す。大槻以来の過去の下に動作時制を置く方法を廃し、アスペクトを明確に示した。しかし、『漢訳日本文典』当時においても、「完了」への移行期であるとはいえ、この学説が定着していたとは言い難い。なぜ、松本が先進的な「完了」を取り入れたか、

については様々な憶測が成り立つ。しかし、問題となるのは、「完了」を取り入れることによって何を求めたか、である。松本の文法意識の根源を探るため、この疑問を端緒に『漢訳日本文典』の時制項目を再検討していく。

表：『言文対照漢訳日本文典』の時制項目

時に三アリ	現在の時（動詞自體ニテ、之ヲ表ス(終止形)）
	過去助動詞(「キ・ケリ」、「タ」)
	未来助動詞(「ム」、無し)
完了の助動詞（「ツ・ヌ・タリ・リ」、「タ、テシマフ(而了)」 現在・過去・未来完了	
進行法「或動作ノ繼續シテ進行中ニアルコトヲ表シ、若クハ、其ノ動作ハ、既ニ終ワリタレドモ、其ノ結果ノ、尚、存在セルコトヲ、表ス」(テ居ル)	

3 - 2 口語用例にみるアスペクトの特化

三土文典と『漢訳日本文典』の最も大きな違いは、対象とする言葉である。三土文典は当時の一般的な教科書と同じく、文語を対象とした教科書である。対して、『漢訳日本文典』は、留学生のために口語表現の例を併記している。国文法教科書が単純に学說的判断から「つ・ぬ・たり・り」を通常の時制と分けて扱うことに比べ、余程切実な問題である。

『漢訳日本文典』では、文法研究という側面からでなく、日本語教授という側面から過去の下に動作時制を重ねる煩雑な方法を避け、個別のものとして扱う必要があったのではないかと考えられる。当然ながら、アスペクトに対する意識も、より具体的に明らかにされている。表中の項目としてあげられた例にも「テシマフ」があるように、文語例の口語対訳には以下のような例が示される。

鶏、鳴キツ　　鶏ガ鳴イタ、イテシマッタ。
 夜、明ケヌ　　夜ガ明ケタ、ケテシマッタ。（以上2例完了）
 余ガ、昨日、停車場に著^マキシ・ケル時八、汽車八、既ニ發車シテ・ニ・タリ・ケリ・キ
 私ガ、昨日、停車場ニ著^マイタ時八、汽車八モウ發車シテシマッテヲッタ。
 （過去完了）

松本自身、注記に「完了助動詞ノ口語法、文法家ノ説未ダ一定セズ茲ニ諸説ヲ折衷シテ試ミニ一案ヲ立テ大方ノ教ヲ請ワント欲ス」と述べる通り、一案として「て仕舞う」「て仕舞った」「て仕舞ってをった」を挙げるのみであるが、口語に用いるテ形アスペクトの明示は、評価されるべきであろう。

3 - 3 三矢重松の口語法研究からの影響

完了の助動詞の一用法として、松本は「進行法」を挙げている。これは「テ居^{イ・ヲ}ル」を用いた「動作の継続」及び「結果の存在」を著すものであるとする。動作の継続と、結果の残存を進行法の名の下に一つにまとめ、その上用例も「テ居ル」のみとしているのは、非常に乱暴なように見えるが、これは、恐らく三矢重松の学説を取り入れたものであらうと考えられる。明治三十二年（1989）に三矢重松が國學院雑誌上に発表した「口語の研究」、「第三時」に類似の記述が見られる。ここで三矢は、現在・過去・未来の「時」の次に、「継続態（進行態）」及び「存在態」を挙げる。詳しい説明は省かれているが、用例を見る限り、「動作の継続」及び「結果の存在」を示していると言って良いだろう。

明治四十一年に出版された三矢重松代表著作『高等日本文法』の分類は「存在継続態（進行態）」として一括し、「て居る、てある」の用例を挙げており、法・態の名称の差こそあれ、『漢訳日本文典』の進行法と一致している。「口語の研究」に挙げられた用例を見ると、「テイル、テアル」が混交したままとなっている。『漢訳日本文典』では学習者の混乱を避けるため、「テイル」に統一したのかもしれない。

尚、『高等日本文法』出版同年に上梓された『漢訳日本文典』訂正増補二十三版では用例に「テアル」が加えられ、再訂正三十二版では「テアル」を「存在態」として別に項目立てし、区別の意識をより明確なものとしている。

三矢「口語の研究」は、松下大三郎の口語法研究に並ぶ、口語法研究の先駆である。松本は、本来、文語を対象とする「文典」において、口語法研究の成果を早くも取り入れている。ここでもやはり、日本語教授という目的の特質が表れていると言える。

三矢重松「口語の研究」（発表時添付）

三矢重松遺著『文法論と国語学』安田喜代門編 昭和七年・1932 中文館書店

4 まとめ

本論では、明治期日本語教育文典についての学史的視点による研究を再提案し、松本亀次郎『漢訳日本文典』を対象として考察を行った。

『漢訳日本文典』の「時」には、『漢訳日本文典』の学説、文法意識が表れている。一面においては、国文典に表れた先進的学説を取り入れ、また、一面においては、当時始まったばかりの口語法研究の成果を取り入れる。『漢訳日本文典』は留学生に対する日本語教授という全く新しいジャンルに供された最初の教科書である。従前の国文典にはなかった口語への高い意識と、日本語教授への意識がこの「時」の記述に表れている。この「時」についての記述は『漢訳日本文典』の学説と意識を探る上で、その象徴として留意することが必要であると、学史的視点から考えられるのである。

今後、『漢訳日本文典』と松本亀次郎の学説の発展、三矢重松との学術的交流について、さらに調査を進めていく。また、『漢訳日本文典』のような言文対照文法教科書が、どのように利用され、どれほど有効であったのかという問題にも、今後の調査課題である。発表に際して閲覧した教科書類

松本亀次郎 『言文対照漢訳日本文典』 中外図書局 1904(明治37年7月)初版 國大*

松本亀次郎 『言文対照漢訳日本文典』 中外図書局 1904(明治37年10月)再版 國大

松本亀次郎 『言文対照漢訳日本文典』 中外図書局 1906(明治39年5月)11版 國大

松本亀次郎 『言文対照漢訳日本文典』 国文堂書店(東京、内藤奎運堂書店)
1917(大正年12月)訂正増補27版松本亀次郎 國大

『言文対照漢訳日本文典』 日本堂書店(東京、富山房)
1935(昭和10年4月)訂正増補38版 都立中央図書館・実藤文庫

三土忠造 『中等国文典』上巻 富山房 1898(明治31年6月)再版 坂本架蔵

三土忠造 『中等国文典』中巻 富山房 1899(明治32年7月)7版 坂本架蔵

三土忠造 『中等国文典』下巻 富山房 1898(明治31年12月)再版 坂本架蔵

三矢重松・清水平一郎 『普通文法教科書』上巻 明治書院
1903(明治36年3月)7版 佐賀県立図書館

三矢重松・清水平一郎 『普通文法教科書』上巻 明治書院 1902(明治35年5月)6版 筑波大

三矢重松・清水平一郎 『普通文法教科書』中巻 明治書院 1901(明治34年10月)
再版 85~88頁脱落 筑波大

三矢重松・清水平一郎 『普通文法教科書』中巻 明治書院 1904(明治37年)6版 鳴門教育大

三矢重松・清水平一郎 『普通文法教科書』下巻 明治書院 1901(明治34年12月)再版 筑波大

* 初版本は2006年9月現在、不明本となっており、閲覧することが出来ない。発表者は、不明となる以前に閲覧し、研究にはこの複製を用いた。

・ 参考

三矢重松 「口語の研究」

【第三時】例文

四、継続態(進行態)

全現在 雨ガ降ツテヱル(ヲル)

全過去 雨ガ降ツテアツタ(ヱタ、ヲツタ)

五、存在態

書イテアル 書イテヲル

植ワツテアツタ 流レテ居ツタ